

# 人文学 スープとしての役割



ふじはら かつし 1976年生  
 まれ。専門は農業史、食の思想史。  
 著書に「ナチスのキッチン」「食べ  
 ること考(その二)」など。

政治学者の白井聡さんと鋭い研究者が対談するイベント「関西スクエア 中之島クロストーク」(朝日新聞社主催)の第15回が、2月23日に開かれる。ゲストは、農業や食のあり方と政治、社会との関わりについて研究する京都大学人文科学研究所准教授の藤原辰史さん。対談のテーマ「人文学の未来」などについて、現在、集中講義のためドイツに滞在している藤原さんに寄稿してもらった。

**藤原辰史さん**(京大人文科学研究所准教授) **寄稿**

ドイツのハイデルベルク大ポランドのヤゲウオ大学で学で「近代日本の食と農」とは「日本の漬物の産業化」にいうゼミを担当している。毎ついで、学生や教員のままで週金曜日の朝9時から13時まで、薄暗い図書室で世界各地から来た10人前後の院生たちと、食と政治、経済、文化との関係について議論するのは学は1425年、ヤゲウオ大ともて楽しんで。言語は英語たは1964年が創立年だ。が、日本語、中国語、韓国語、リトアニア語、ドイツ語環境は厳しい。どこも国際的な競争にさらされ、資金獲得の料理名も飛び交う。

ほかにも、同大学では第1次世界大戦期の食と拙著「トラクターの世界史」について、哲学などの人文学への風当たりが強いのは日本だけで、でもトラクターについて、ない。

## 厳しい時代 人を内側からあたためる

けれども、幸いにも私はこれらの大学で人文学の原点に触れることもできた。どの大学も誕生時から人文系諸学を重視してきた。ルーヴェン大学図書室の展示「エラスムスの夢」ではこの大学で、教鞭をとった人文学者のエラスムスに強い影響を受けたある学者がラテン語、ヘブライ語、ギリシア語の三つの言語を学ぶ機関を1517年に創設した経緯が説明してあった。英語のみで学問の国際化を進める現在の風潮に警鐘を鳴らすものであった。

私は学問の原点がヨーロッパにあるということや、学問の原点ではない。学問の原点は他者への敬意と知への熱意なのである。ハイデルベルク大学では小さな研究会が頻繁に開催され、度々食事に誘われた。また、トラクターや食という一見人文学とは縁遠いテーマでも、こちらが熱意を持って伝えれば、十分にその歴史的文化的意義を理解してくることに手応えも感じた。

各地域の名物料理を食べながら研究者と意見交換することも貴重な体験であった。とくにヤゲウオ大学の先生に講義のあと、小さなレストランでポランド名物ジュレックをこ馳走になったのは忘れがたい。発酵イ妻パンのペーストと野菜とニンニクを煮込んだスープで、冷や切った体の隅々まで温もりが広がった。ここでも研究資金や学内政治の話はしない。先生は、研究課題である日本の茶碗の美について話してくれた。

私はジュレックをすすりながら、普段の生活のなかで、内側から人々を生きようと力づけるものとは何かについて考えた。そして、人文学者のエラスムスもまた講義のあとワインの栓を開け、簡単な食事をとりながら学生たちと議論を続けたことを思い出した。

人文学とはおそらく、道が凍るような寒い日に食べるジュレックのように、厳しい時代を生きる人間を内側からあたためてくれるものなのだ。もちろんそのなかには様々な具が発酵し、溶け込んでいなければならぬ。

## 来月23日にクロストーク

中之島クロストークは2月23日午後6時、アサコムホール(大阪市北区中之島2の3の18、中

之島フェスティバルタワー12階)で。定員100人。無料。詳細は「朝日新聞 関西スクエア」のホームページ (<http://www.kansai-square.com/>) 内。申し込みは4日まで。